

E4. 学生が主体的に構築していく新たな「学びの空間」

京都大学 附属図書館ラーニング・commons



ラーニング・commons

附属図書館を模様替えして設置したラーニング・commons。学生による自主的かつ多様な学びのスタイルに対応する「学びの実験場」をコンセプトにした空間。

■ 学生支援機能の充実

吉田キャンパス内にある附属図書館（S58 R4-2 14,011㎡）の一部エリア（455㎡）の模様替えを行い「ラーニング・commons」を整備したものである。

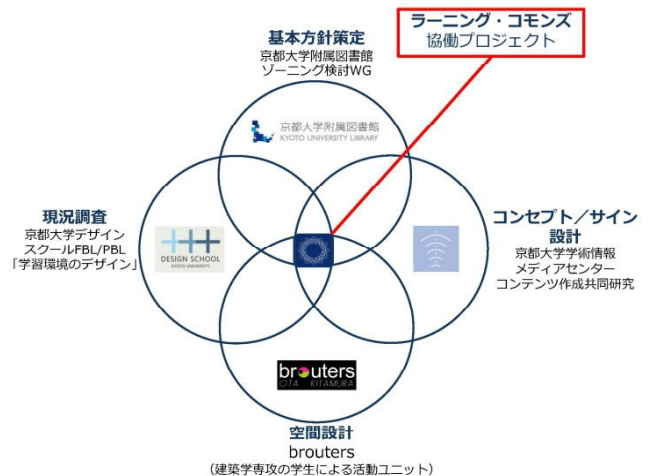
京都大学の理念「対話を根幹とした自学・自習」と共鳴し、学生による自主的かつ多様な学びのスタイルに対応する「学びの実験場」をコンセプトにした空間となっている。グループワークやディスカッション、プレゼンテーションや展示などの様々な利用形態を想定しており、学習と表現、そして知的交流の場として活用されることを期待している。

■ 多様なリソースを活用

附属図書館職員で構成したワーキンググループにより、図書館として想定する機能要件を検討した。その上で、学術情報メディアセンター・コンテンツ作成共同研究「大学図書館スペース協働デザインによる新たな「学び」への展開」に参加した教職員、およびデザイン学大学院連携プログラム（デザインスクール）の講義FBL/PBL「学習環境のデザイン」の関係教員と受講生らによる連携により、コンセプトやデザインを具体化している。空間デザインに始まり、什器の選定からサイン制作まで、京都大学の学生、教員、図書館職員がコラボレーションチームを構成するとともに、ユーザーである学生自身が基本設計に携わった。こうした協働により計画を推進したことで、本学のもつ多様なリソースが集まり、また、学生が主体的に構築していく、新たな「学びの空間」が生まれることとなった。

■ 交流促進への配慮

中央の木造物は、京都大学のシンボルであるクスノキをモチーフにしたものである。その下における集いと創発を意図し、



ラーニング・commons協働プロジェクト概要



平面図

ラーニング・commonsの機能を象徴する。また、均質な既存の図書館空間に木の素材を使ったやわらかな造作を挿入することで、知的な光の揺らぎがある、躍動する空間を創り出している。

■フレキシブルな空間

利用する学生の学習形態やグループの人数に応じて、自由に組み替えて使用できるように、移動可能な机、前傾姿勢に角度の変更される椅子やスツール、クッションを配置している。

また、既存の壁面書棚に取り付けたホワイトボード付き扉を開くことにより、間仕切りされたグループのための空間となる。

壁面に大型ホワイトボードを設置しており、映写も可能である。さらに、無線LANとともに、多数の電源コンセントを備えており、任意の場所でパソコンやプロジェクタを利用することができる。

■従来の図書館との接続性に配慮

図書館内に設置するラーニング・commonsとして、従来の図書館空間や機能との接続性に配慮した。このため、防音に配慮した見通しの利くガラス壁で閲覧エリアと区切ること、空間の一体性を確保している。また、既存の壁面書棚、木製の机と椅子を改修の上、活用している。

■多様な学びと学問分野を超えた交流の場の創出

これまでの図書館には無かった「対話」に主眼がおかれたスペースであり、学生間の活発な意見交換を誘発し、学習の多様化に繋がっている。フレキシブルな空間を活用し、様々な規模のグループが利用しており、平日午後には常時50名を超える利用がある。また、院生スタッフによる学習サポートデスクを設置し、ピアサポート活動の場ともなっている。

加えて、教員によるレクチャーシリーズ、読書会、図書展示などのイベントを実施しており、オープン以来3か月間の参加者はのべ300名を数え、人的交流の場としても機能している。

利用者からは、「ホワイトボードや電源が使えて、議論ができる場所があるがたい。」「図書館内にあるスペースなので、学習の場という目的意識をもって使える。」「このオープンな空間を活かして、公開セミナーを行ってみたい。」といった声があがっている。

■学習サポートデスク

エリア内には、学習サポートデスクを設置。様々な分野の大学院生スタッフが図書館の利用方法や学習に関する相談に答える。また、すべてのスタッフが日本語と英語で対応できる。

資料探しに困ったり、レポートの手助けが必要になったりした場合は気軽に相談できる。レポート執筆やプレゼンテーション技法に関する図書も備えている。



壁面書棚に取り付けたホワイトボード付き扉を使ったグループワーク



壁面大型ホワイトボードを使ったミニゼミ



ラーニングcommonsの間仕切り



玄関から奥のラーニングcommonsを見る



サポートデスク

E5. ゆとりと潤いのある美しく魅力的なキャンパスの整備

岡山大学 大学会館周辺環境整備

環境整備
全景



交流広場

東西道路



桜広場

美しい学都構想の実現のため、多くの学生たちが集い様々な人々の交流の拠点となるように大学会館周辺からキャンパス全体に大きく広がっていく、都市に開かれた大らかな空間づくりを実施。

■「美しい学都」の形成

大学と都市・地域が連繫（れんけい）した新たな「美しい学都」の形成に向けたキャンパス整備を推進している。多くの学生たちが集う大学会館周辺の活動が一層活発にキャンパス全体に大きく広がり、都市に開かれた大らかな空間となることを目指し、「交流広場」、「桜広場」、「東西道路」それぞれのゾーンで特色ある環境整備を実施した。キャンパスの創造的再生に向け、大きな一歩を踏み出した。

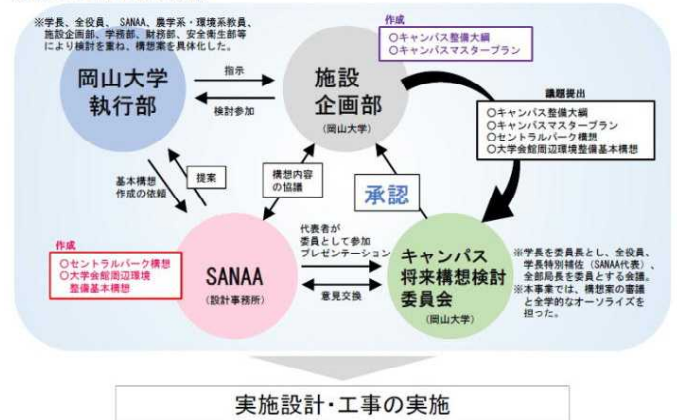
■森田ビジョンとセントラルパーク構想（企画から運用まで）

森田学長は、就任した平成23年に発表した森田ビジョンにおいて、岡山大学を「国際的な研究・教育拠点としての『美しい学都』」とすることを宣言し、建築界のノーベル賞と称されるブリツカー賞を受賞し、仏・ルーブル美術館別館などを手がけた建築家ユニット「SANAA（サナア）」の妹島和世氏と西沢立衛氏を学長特別補佐に招聘（しょうへい）した。

また、平成23年11月には、全役員、学長特別補佐、全部局長を委員とするキャンパス将来構想検討委員会（以下、「委員会」という。）を設置し、『美しい学都』構想を推進するための体制を整えた。

学長特別補佐の委員会における提言に基づき、岡山大学は津島キャンパス中央の軸となる部分を公園化する重点投資を行い、三つに分離しているイメージの強いキャンパスを一体化す

設計プロセスと推進体制



セントラルパーク構想

るとともに広場としての機能も持たせ、人が自然に集まるにぎわいのある場所にしていくことによって、美しく魅力的なキャンパス環境を形成する「セントラルパーク構想」を掲げ、キャンパスマスタープランにも盛り込み推進することとなった。

教養教育の行われる一般教育棟や学生の交流拠点である学生会館の周辺は、全学生が在学中に深く関わるキャンパスの中核部に当たるため「セントラルパーク構想」に基づく初めての大規模整備場所にふさわしいと考えられ、学生会館周辺環境整備はスタートした。基本構想作成はSANAAが担当し、学長、全役員、SANAA、農学系・環境系教員、施設企画部、学務部、財務部、安全衛生部等の参加で検討を重ね構想案を具体化した。

また、委員会においても議論を重ね全学的コンセンサスを形成した。学生会館周辺環境整備は、岡山大学がより美しく魅力的なキャンパス環境を形成するための第一歩である。

■都市に開かれた大らかな空間

美しい学都構想の実現のため、多くの学生たちが集い様々な人々の交流の拠点となるように、学生会館周辺からキャンパス全体に大きく広がっていく都市に開かれた大らかな空間づくりを行った。

○交流広場

全面駐輪場として利用していた学生会館の中庭を、学生たちが集い休憩できるような空間とするため、中央に大きなパーゴラを配置し、その周辺にはこの土地で成長可能な樹木を植樹し、庭ではなく森のような空間を形成した。そこは、暑い夏には森の木陰を、冬には陽光ふりそそぐ場所をつくりだし、四季を通して学生たちがお昼を食べたり、休憩したり、様々な活動が活発に行われるような空間づくりを目指した。

○桜広場

もともとこの場所には桜が植えられていたが、配置が西側に偏っている上に樹木の密度が高すぎることが桜の成長を阻害する要因となっていた。既存の桜を生かしながら桜を移植、新植することによって桜の配置や密度を最適化するとともに、表面は芝生張りとし、将来は10mを超える高さに成長した桜に囲まれた緑豊かで華やかな広場となることを目指した。

○東西道路

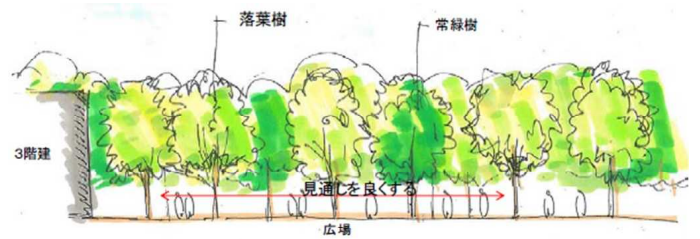
東西道路の敷地境界は、中低木・フェンス・段差によって往来と視界が隔てられていた。また、並行して走る歩道は狭く通行に支障があった。こうした問題を解消するため、既存の中低木・フェンス・段差をなくし、大学側に歩道を広げる整備を行った。既存樹の大きなケヤキを生かした開放感のあるレンガ舗装の並木路となった東西道路は、学生や教職員、地域住民がゆったりと安全に通行でき、また、休憩スペースとなるベンチも備えた道のような公園のような空間である。

■落葉樹による日射の調整と常緑樹の活用

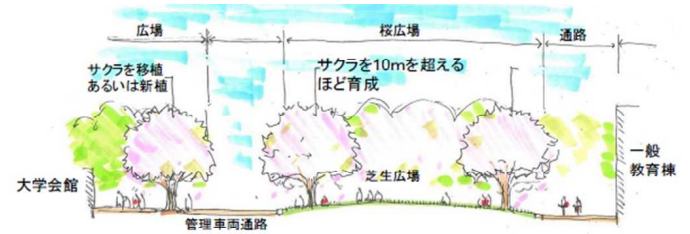
環境整備に用いた樹木は、落葉樹を多く採用することによって、夏は青葉が日よけとなる緑陰空間が広がり、落葉した冬は陽（ひ）当たり良好な明るい場所となることを目指した。落葉樹を主とする中に常緑樹も混在させ、冬でも樹木の生命力が感じられるよう配慮した。

■地域に開かれた屋外イベントの中核拠点

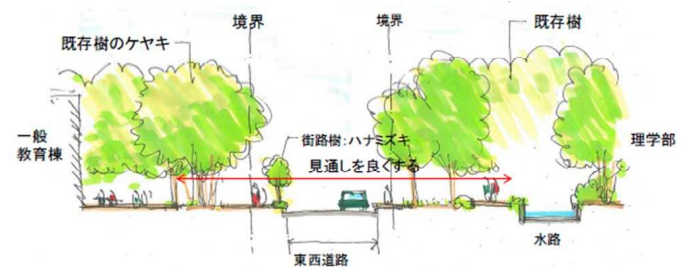
本整備範囲は合格発表、学園祭、ホームカミング日の会場となるなど、屋外におけるイベントの中核拠点として活用されている。本整備が完了した冬には岡山市に積雪があり、学生や地域住民が交流広場で雪遊びを楽しむ姿が見られた。また、春には桜や花木が咲き、夏は暑さを和らげる緑陰空間、秋の紅葉と四季折々の楽しみがあり、地域に開いた憩いの場として親しまれている。



交流広場コンセプト



桜広場コンセプト



東西道路コンセプト



交流広場



桜広場



東西道路

E6. 大学と地域をつなぐ架け橋として重要な役割を担うホール

岡山大学 Junko Fukutake Hall



東側外観



重なる屋根とガラスの外壁

地域に開かれた大学の顔として、斬新なデザインで可変的に利用可能なホールを寄附により整備。

■ 地域に開かれた大学の象徴、岡山のシンボル

国際的な研究・教育拠点としての『美しい学都』創成という岡山大学のビジョンと、公益財団法人福武教育文化振興財団副理事長福武純子氏の、『岡山が市民と大学の垣根のないまちとなること、自由で知的なコミュニケーションから新たなものを創造が生まれる場となるために、大学には重要な役割がある』という思いが合致し、地域に開かれた大学の象徴として、また、多くの人がここに集う岡山のシンボルとして、福武純子氏の寄附により実現に至った。

■ 森田ビジョンと医学部創立150周年事業

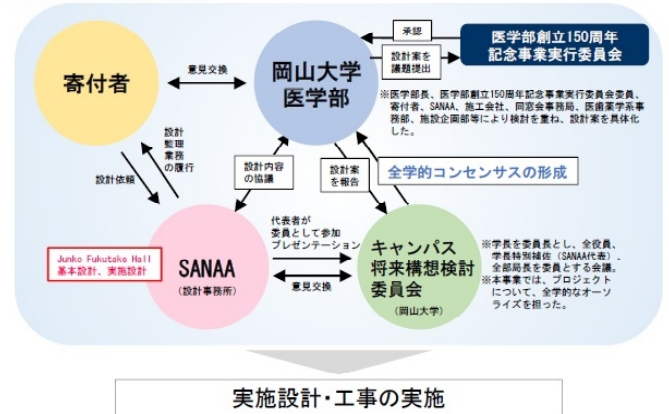
森田学長は、就任した平成23年に発表した森田ビジョンにおいて、岡山大学を「国際的な研究・教育拠点としての『美しい学都』」とすることを宣言した。また、岡山大学医学部同窓会は、創立150周年に向けた平成23年からの10年間をルネッサンス期間と位置づけ、21世紀の新たな飛躍に向けた創造的な取り組みを展開することとし、その中でキャンパス内に学会や国際シンポジウムが開催できるホールを建設することは人材育成の場として必須と位置づけていた。本プロジェクトは、こうした大学の方向性が寄附者の思いと合致したことから実現したものである。

寄附形態は建物現物寄附とし、建物の設計は寄附者の希望により、人が集い交流する場のデザインに実績があり、仏・ルーブル美術館別館などを手がけた建築家ユニット「SANAA（サナア）」に決定した。設計案は、医学部長、医学部創立150周年記念事業実行委員会委員、寄附者、SANAA、施工会社、同窓会事務局、医歯薬学系事務局、施設企画部等により検討を重ねて具体化し、最終的に医学部創立150周年記念事業実行委員会の承認事項とした。また、本学の全役員、学長特別補佐、全部局長を委員とするキャンパス将来構想検討委員会にも数度にわたって報告し、全学的コンセンサスを形成した。

■ 交流促進への配慮

○人々や街に開かれた建築

設計プロセスと推進体制



北側外観



南側外観

人と人が出会う場であること、交流ができることによって、より創造的な活力がえられるような場所を計画した。学生や地域の人々など誰もが気軽に開かれ、自由に使えるような建物を目指した。

○広場のような建物

空間を明確に区切ってしまわずに、可変的に大きく使ったり小さく使うことができ、また、周りの庭とつなげて使ったりといろいろな使い方をすることが可能で、学生やまちの人々が気軽に立ち寄って勉強したり読書したり、イベントや講演会を行ったりすることができる広場のような建物を目指した。

○大学の顔としての建物

岡山大学は地域に根ざした大学であり、学内外の人々が親しみと誇りを持てるような大学であるように、この施設は四角く閉じられた建物ではなく開放的な開かれた建物となっており、地域に対して開かれた大学であるという岡山大学の新しいメッセージを内外に知らせる重要な役割を担っている。

■広がっていく空間

小さな空間が集まってつくられるただの長方形ではない集合的な平面。建物と外部が混ざり合い、中と外が段階的につながっていくような連続感をつくることで建物と周辺環境との調和を生み出した。外壁にガラスを使用することで中で行われている活動がキャンパスを歩いている人や近くの建物の中からも伺うことができ、キャンパス全体へ、そしてまちへと広がっていく。

傾斜した屋根は空間の中に変化をつくり、それらが集合体となって重なり合うことで高い場所や低い場所、明るく開放的な場所や木陰のように落ち着いた場所など、ひとつの空間の中に多様な場所をつくり出している。複数の屋根の集まりは、見る方向によって様々な表情を見せてくれる。

医学部の正門や講義棟、病院など、様々な人がいろいろな方向からこの場所に集まってくることを想定し、どこから来ても迎えられるような、いろいろな方向に向いている建物の配置、形態とした。

■可変性の確保

メインのホールとなる「ホール1」は、210席の固定席があり、「ホール2」と「ホール3」を連続させて使用することで最大354席のホールとして使用することができる。大きなカーテンによって空間を暗転することができ、プロジェクターを使用した講演会やイベントにも対応する。「ホール2」は単独で100人規模の小ホールで「ホール3」と「会議スペース」を使用し、「ホール1」と「ホール2」とも合わせて使用すると、最大410席の設定が可能である。

■環境負荷の低減

○大きな庇(ひさし)空間

へりを大きく張り出すことで直射日光の侵入を防ぎ、空調負荷の低減を図った。

○敷地内の緑化

既存の樹木を残しつつ敷地内の緑化を行うことで日射を適度に遮り、室内への日射の侵入を抑制することで空調に対する熱負荷低減を図った。また、緑化による空気浄化作用は、敷地内に心地よい快適性を生み出している。

■Jプロジェクト

『美しい学都』創成という岡山大学のビジョン実現のため、Junko Fukutake Hallに続き、福武純子氏の寄附により、垣根のない開かれたキャンパスづくりを目指してJunko Fukutake Terraceも整備された。



メインアプローチ

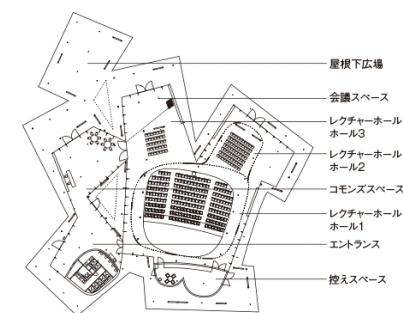


ホール1



ホール2

平面図



会議スペース

平面図



大きな庇(ひさし)空間



敷地内の緑化



Junko Fukutake Terrace 東側外観



Junko Fukutake Terrace 全景



Junko Fukutake Terrace 内観